

豊庄だより



第 532 号 2018 年 9 月 10 日

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

久しぶりに共感・納得できる講演を聞きました。講師は、京都大学名誉教授の鯨岡峻（くじらおかたかし）先生。講演の資料に書かれていたプロフィールによると、京都大学を定年退職されたのが 2007 年（平成 19 年）ですから、おそらく 80 に近いお歳でしょう。休憩をはさみ約 3 時間、「子どもの心を育てる保育のために」というテーマで熱く話されました。先生の話聞くのは今回で 5~6 回目になりますが、御用学者が多い中、保育の神髄を話される数少ない先生だと思っています。

前書きはこれくらいにして、話の内容を紹介します。といっても 3 時間の講演を 1500 字足らずでまとめるのはとても不可能です。ここでは私が一番印象に残ったところを中心に書きます。

鯨岡先生は講演の冒頭に、「保育実践の中で子どもを育てるとき、何かをさせて力をつけることが子どもを育てることだと思いませんか？」と問いかけられました。そして、「『その期にふさわしい子どもの姿』をクラス子ども全員がクリアすることが、自分の保育の目標だとするのは、子どもを外側からだけ見て、『できる、できない』で子どもを見てしまうことになる。もっと子どもの心の動きを見なければ」と話されました。

さらに、「子どもの心の中は、『おもしろい、楽しい、うれしい、もっとしよう』というプラスの心が動くときもあれば、『面白くない、うれしくない、楽しくない、嫌だ、寂しい、一人ぼっちだ、不安だ、誰も私のことをわかってくれない、あの子とはもう遊びたくない、先生は他の子ばかりだ、』とマイナスの心が動いたりします。負（マイナス）の心が動いている時にどのように対応するかについてはほとんど触れられてきませんでした。そればかりか、ひたすら頑張る心を育てる、意欲的に物事に向かう心を育てる、自立する心を育てる



8 月 20 日（もも組）

等々、望ましい心をあげつらうだけで、その逆の負の心に丁寧に対応することが保育する営みにおいてむしろ重要である」と、現在の保育が目指している方向性に疑問を投げかけられました。

ここからは、私の意見です。鯨岡先生が言われる通り、子どもの心の動きに常に気を付けていくことが大切です。最近の保育界では、コミュニケーション力をはじめ、〇〇する力をつけるということが叫ばれ、そうした力をどれだけ身につけているかということが求められる傾向にあると思います。こうしたことは、学校でも同じで、評価をするにあたり、「関心・意欲・態度、話す・聞く能力、書く能力、読む能力、知識・理解・技能」という観点を設け、その到達度によって ABC をつけています（小学校通知表の国語を参考にしました）。保育について学んだ人は、保育で一番大事なのは子どもに寄り添うこと、ちょっと難しい言葉で言うなら、「受容と共感」というでしょう。自分の気持ちをまだ十分に表現できない子どもの気持ちを受け入れ、そして「そうだね」と共感することはとても大事なことです。しかし、今回の鯨岡先生の講演を聞き、子どもたちの気持ちの動きにどれだけ寄り添っているかとなると・・・こうした場面でこそ保育士としての専門性や真の技量が問われていると思います。